

<週報No. 2, 929> 3, 040 回例会

2020年10月16日(金)

■会長／岩波 寿亮 ■幹事／小口 泰幸

◆司会＝小針 哲郎 副SAA

◆ゲストビジター＝岡谷エコロータリークラブ、山崎廣和様、米山奨学生、何珊珊(カ・サンサン)様

◆出席報告

本日	100.00%	0名欠席
前回訂正	100.00%	0名欠席

◆ラッキーナンバー＝No.2 小林恭一君

◆ニコニコボックス ●岩波寿亮君、小口泰幸君＝岡谷エコロータリークラブ、山崎廣和様、米山奨学生、何珊珊(カ・サンサン)さん、ようこそ諏訪クラブへ●小林恭一会員＝ラッキーナンバーに当たって。

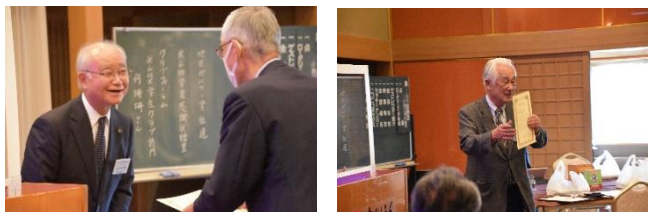
◆会長告知・岩波寿亮会長＝最近コロナ鬱という言葉が聞かれます。ソーシャルディスタンスを確保するため三密や濃厚接触を回避する事は予想以上に大変なことで多くの人々は失われた三密や濃厚接触を懐かしみ渴望しそれを生まれたことに不安を感じ始め社会における身体的近接性の重要性の認識が決まりつつあると記事に書いてありました。少なくとも人に直接会う存在感や雰囲気を感じて話し合いをすることの重要性は一定の役割が認識されるようになってきていると思います。一方で働く場所を見直すきっかけになり都市と地方の両方に拠点を持って仕事をする二地域居住、地方観光地で休暇を取りながら仕事もこなすワーケーション、これらが従来からIターンやUターンを誘致してきた地域にとっては関係人口の増加に繋がり関係することであり地域の消費を拡大させ活性化につながるかもしれません。この動きが広がり定着するためには現地での移動手段の確保が問題になり、仕事以外の生活の利便性の提供が課題になるのではないのでしょうか。ワーケーションに関しては、いかにリピーターになってもらうかが重要だと考えます。with コロナの新しい働き方は新しい地方活性化のチャンス定着させアフターコロナ時代へとつなげるためには、地域の関係者が連携し同時に自治体が主導して移動手段通信手段モビリティの利便性向上により三密濃厚接触が戻った時代にもそのまま選ばれる地域にしなくてはなりません。そんな時代が来る

か分かりませんが、その中でのテレワーク時代はどんなことになっていくのでしょうか。昨日、今年のオンライン工業メッセの実施が発表になりましたリアルメッセは行わないわけです。アフターコロナのメッセのあり方は相当難しくなると思います。話は変わりますが淡路島へ本社を移すパソナの南部代表は、「ここでは車がないと生活できないから車のリース代に補助金を出している」と言いながら「真に豊かな生き方在于るが目的」「豊かな生活は心の黒字」と。「給料が高ければいい」「売上利益が大きければいい」「一部上場ならいい」は数字の黒字。そうじゃない「心の黒字が豊かな生活」ということ、自分自身のたった一度しかない人生をどれだけ楽しい思い出が作れるか。コロナは真の豊かさとは何かを働くものに目覚めさせた大きなきっかけになったんです。と記事にありました。さて、最近例えば観光地の目指す所をモノ消費からコト消費へあるいは意味消費とされています。そんな中で6市町村を巡るトライアスロン大会を目指して実行委員会が発足しました。自治体が六、警察が三、これから多くの課題に挑戦していきます。ものづくり企業とコラボしてのGPS機器開発、環境活動に貢献したいという団体や企業とのコラボも課題です。GPS機器の開発では諏訪市の産業連携補助金を頂く事となりました。環境活動の一つとしては諏訪湖の水をKITZの協力で浄化し地ビールを作っています。来週第一弾の試飲ができるかもしれません。ロータリークラブの会員の皆様にも色々ご協力お願いをして参りたいと思います。是非ともよろしくご協力お願い致します。

◆幹事報告・小口泰幸幹事＝役員及び理事指名委員会について、本年度は内規通りで行うことで承認されました。11月8日日曜日のバスハイクは取りやめ、フェリススクールの美食会を行うことになりました。詳細につきましては親睦委員会からご案内いたします。新入会員候補者の1回目の審議が行われ承認されました。河西会員から演台にアクリル板を設置の提案があり、今日から使用しております。10月4日の地区大会に会長以下8名で参加して参りました。資料を配布しましたのでご覧頂けたらと思います。なお各種表彰で当クラブの有賀昭彦会員と藤森郁男会員が40年在籍者で地区ガバナー賞を受けられました。小口武男会員に米山功労者第10回メジャーダーの感謝状とバッチが届いています。後日贈呈をします。本日は世話クラブ岡谷エコロータリークラブの米山奨学生何珊珊様とカウンセラーの山崎廣和様に

越しをいただきました。何さんは中国出身で現在信州大学人文学科2年生です。後ほど卓話をお願いいたします。次回23日の例会は青少年奉仕委員会担当のアクト合同夜間例会です。30日に行われる図書贈呈式のご案内を本日FAXしました。多くの皆様のご参加をお願いします。本日例会終了後に臨時の理事会を行います。

◆地区ガバナー賞 有賀昭彦会員 藤森郁男会員



◆クラブフォーラム 米山奨学会委員会

●会員卓話・岡谷エコロータリークラブ カウンセラー

一の山崎廣和様＝米山奨学生についてお話しします。今年度は883名の米山奨学生に奨学金を支給。国別では1番目が中国で341名、2番目ベトナムが121名、3番目韓国で73名、4番目マレーシアで49名、5番目インドネシアで36名、その他の国263名。2600地区、19名の奨学生は、中国、ベトナムがトップ各6名です。後は1名ずつ、パキスタン、パラグアイ、スリランカ、バングラデシュ、モロッコ、韓国、ドミニカ共和国です。何珊珊さんは、非常に成績優秀で選ばれ、大変礼儀正しい学生さんです。何さんは、2018年4月に信州大学人文学部哲学思想論専攻の研修生課程に入学、2019年4月からは人文科学研究科地域文化修士課程に入学。現在は修士課程2年生です。日本の博士号を取得し、そういう職を目指している大変向学心のある学生さんです。奨学生の役割は、毎月1回、世話クラブの例会に参加して奨学金を受け取ります。年3回の卓話があります。世話クラブ1回。他クラブ2回です。1回目は先日、木曾ロータリークラブ、本日2回目です。地区の行事、世話クラブ・交流クラブの奉仕活動や夜間例会の懇親会などに参加し、交流を深めることも求められています。コロナの影響で例会に出席しているがその他の事業には全く参加できないのが現状です。米山奨学生同士、大事な交流も全くできていない、本当に今年度の奨学生は気の毒という感じです。9月と2月には奨学生のレポートの提出があります。カウンセラーのレポート提出も



10月と3月です。年間スケジュールとお考え頂ければと思います。相互理解が深まる機会になれば幸いと思います。最後になりますが何さんは日本食の好き嫌いが一切ございません。一番大好きなのは日本酒です。本日もどうかよろしくをお願いいたします。

●米山奨学生 何珊珊様



皆さんこんにちは。信州大学人文科学研究科修士課程2年の何珊珊と申します。中国広東省の出身で、今大学院で明末における

中国人の基督教信者について研究しております。今日の話は、まず出身地の紹介、日本に留学してきた理由、研究テーマについて、最後は学生生活で感じたことについて紹介させて頂きたいと思います。出身地の紹介です。私は中国広東省の出身です。広東省は中国のどこかと言うと、中国の南の方に位置して、北は福建省、江西省、湖南省と接して、省の南には香港・マカオの2つの特別行政区があります。言語は、主に広東語を喋ります。広東語の発音と標準語（北京語）の発音は全然違います。例えば挨拶をする時に、日本語だと「こんにちは」、北京語だと「ニーハオ」 広東語だと「ネイハウ」です。また広東料理は四川料理で味が薄いです。中国国内には、広東の人は何でも食べると言う噂があります。日本に来て、日本人に自己紹介をする時、広東出身と言うと、「広東の人って何でも食べるのですね」と。中国人は四つ足の机以外なんでも食べるという伝説は日本でももはや定番だと思うのですが、広東人の伝説は、日本にも伝わってきた感じがありました。ここで言いたいのは、広東の人はそうではないのです。飲食習慣ですが、個人差があります。何でも食べる人はもちろんいますが、むしろ一般的な食生活を送っている方が多いです。私のような人間です。次に日本に留学してきた理由です。大学で日本語を専攻し、交換留学をきっかけに、日本人の中国思想に対するイメージを解明したくなり、信州大学で授業を受けることになりました。私の出身地である広東から北上し、当地の知識人に接近することができたという話を聞いて、それが大変面白いかなと思いました。西洋思想の中核は基督教であり、中国思想の中核が儒家思想とされています。西洋思想と中国思想との交流を研究する場合において、基督教と儒家思想との交流は、

非常に研究する価値があると考えられています。近代以前において、明代の方が適応政策を採用して、明らかにキリスト教信を中国の中に持ち込むことに成功しました。適応政策とは、現地の思想・文化を尊重し、それに適応した形で活動を展開する方法であります。実は当時の儒教、いわゆる宋明理学とキリスト教には相いれないところが多いです。例えば当時の儒教には、この世界は理と気によって自然に生成したものだとされています。それに対してキリスト教の場合は、この世界はゴッド・神様によって造られたものだとされています。そのため明代におけるイエズス会についての研究が、西洋思想と中国思想との思想交流史を解明することがより重要だと考えたうえで、明代中国人キリスト教信者を巡って研究したいと決意しました。最後に私の学生生活で感じたことです。私は中国の大学を卒業してから日本の大学院に進学しました。私は日中両国の大学生活を体験したのです。私自身で感じた日中両国の大学生活の相違について。中国の大学だと寮生活です。寮はキャンパスの中にあり、学ぶ、暮らす場所となります。ひとつの部屋に4人から6人で、お手洗い・ベランダが完備されています。ただし火事の発生を防止するためにキッチンがなく、料理を作る機会がないんです。禁止されています。料理を作ることが。そのため、私と同世代の女の子の中で、料理ができない子が結構います。一人っ子政策で大事に育てられ、親元を離れて大学に入ってきましたが、部屋で料理を作ることが禁止されているために、料理を作り機会もないんです。普段、食堂で食事をします。大学の食堂は、朝7時から夜9時か10時までずっと営業し、朝食から夜食まで食べられます。また料理の種類も多く、地元の料理だけではなく中国各地の料理も食べられます。このような雰囲気与生活するのは寂しい感じはないですね。それに対して日本の大学生活は、キャンパスの勉強生活とキャンパスの外でアパートを借りて、一人暮らしの二つに分けられています。また、深夜までやっている食堂は日本にはなかなかさそうな感じがしますが、ちょっと自信がないのですが。これは多分、学生寮がキャンパス内にあるのではなくて、夜になると学生が居なくなるから。私も今一人暮らしをしています。アルバイトをやっていた、留学生なので主に学校生活で活躍（活動）していました。そして修論に専念するために今年の春にアルバイトを辞めることにしました。コロナのせいで学校の授業もオンラインで受講すること

になりました。寂しい感じは生じてきました。なぜかと言うとコロナの中で、不要不急の外出を避けて、留学生は家族も日本にいない、いったん学校やバイト先を離れたら、社会との縁もゆかりもなくなるような感じがあったからです。2020年4月から私はロータリー米山奨学金を受けることになり半年です。この半年の間には例会に出席し、カウンセラーの方などと交流したりすることによって、たくさんの体験ができました。月に1回の例会出席は緊張しました。これは今までの学生生活では感じなかった部分です。またクラブの方、特にカウンセラーの山崎さんとの交流を通して、日本社会と中国社会との相違をもっと明らかにするようになりました。自分と外との縁が結びつけていると実感し、今後の人生にとっても貴重な経験になると思えました。以上です。ご清聴ありがとうございました。

◆今後の例会日程

10月23日	金	アクト合同例会（夜間例会）
10月30日	金	クラブフォーラム（図書贈呈）
11月6日	金	クラブフォーラム